

山蔭中納言説話の成立

——『長谷寺観音験記』の場合——

星 田 公 一

一、「山蔭中納言説話」の「今昔」型と「長谷寺」型について

藤原山蔭を中心とする龜報恩譚以下「山蔭中納言説話」というが二つ伝えられている。これらは同じ構成を持ち、しかも登場人物も山蔭を中心とする父子関係でつながっている。すなわち、一つは「父||藤原高房、子||山蔭」となっており、他の一つは「父||山蔭、子||如無」となっている。前者は『長谷寺観音験記』下巻「山蔭中納言得||聖人告||造惣持寺||仏事第十三」^①（以下書名を「験記」と略称し、この型の話を長谷寺型という）であり、後者は『今昔物語集』卷第十九「龜、報山蔭中納言恩語第廿九」（以下書名を『今昔』と略称しこの型の話を「今昔」型という）である。

後者の『今昔』の話は既に考察したように、山蔭の七男である如

無のエピソードと、既に存在していたと思われる初期の『総持寺縁起』とを『今昔』の編者が結びつけ改作したものであった。

一方『験記』の序文に

上卷ニハ十九説法ヲカタトツテ当寺ノ旧記ヲヒロイ下卷ニハ三十三身ヲ擬シテ諸家ノ録ヲ撰ス。

とあるように、前者の話は『験記』成立前に何らかの記録として存在していたのである。本稿はその記録が先に述べた初期の『総持寺縁起』であることを解明し、その成立事情、及び後代への影響を考察することから、「山蔭中納言説話」の文学性についても触れようとするものである。

そこで、まず「今昔」型と最も関連の深い『験記』下巻第十三話（以下本話という）の発端部の構成から見ることにする。

二、本話発端部の性格

本話の発端部は亀報恩譚であるが、「今昔」型との比較をするためにも、その概略を次に記す。

(1) 高房が鎮西へ下向する時、淀の穂積の橋の本で、鶺鴒が害せんとする亀を買取って放生する。

(2) その翌日、乳母が継母のかたらいを受けて山蔭を海中に落とす。

(3) 父の高房が観音に祈念し、子を助けてくれたら速に千手観音の像を造らんと言う。

(4) 昨日放してやった亀が甲に子に乗せて浮かぶ。

(5) 畜生でも恩を知る心が有るが、これは観音の御方便によるものである。

以上の概略のうち、観音に関する部分(3)(5)が「今昔」型にはなく、「験記」が観音靈験譚であることからしても、この観音に関する部分に、編者の加筆が推測される。

(3)の本文は次のようになっている。

父ノ高房悲歎ノ余、観音ニ祈念シテ云ク。定業亦能転ハ仰所也。設決定応受ノ業ナリ共、大聖ノ御方便ニヨリテ、再ヒ我子ヲミセ給ハ、速ニ千手観音ノ像ヲ造奉ラント云。

山蔭中納言説話の成立

この本文では、長谷観音を定業亦能転すると言っているが、これは次のように諸家の録を撰した下巻にだけある。

① 下巻十話は、病で死んだ者の家族が観音に願を立てたところ生返ったという話である。その結語に、「実ニ定業亦能転。馮哉」とある。

② 同じく十九話。高助という男が幼い時から当観音を信じているが、効き目がないと、籠り合わせた僧に語ったことに対して、その僧が答えて、

当寺ノ観音ノ御恵ミ、有カタク侍リ。業深ク罪重クシテ余ノ仏菩薩モ今助ノ御助ハ叶ス。(略)昔モ今モ重業ノモノ救ヒカタキハ、其ヲ転シ給ハンカ為ニ、先ツ其サイ逆ヲ与ヘテ

と続き、この僧の言のごとく、餓死すべき宿業を転じて助かる。

③ 同じく二十話。これは連歌の付合いを強いられる難題話となっているが、

長谷寺へ参テ可祈。観音ハ定業ヲモ転シ、叶カタキ事ヲモ叶マシマスヘキ御誓アリ。

となっている。

④ 同じく三十三話。過去に父と海辺で殺生を業としていたことを悔い、父母の滅罪と共に観音に祈願すると、夢に松の葉を持った僧が現われて、

汝深く滅罪ヲ折ル。大聖ノ御方便ニ依テ、過現所造ノ長劫悪趣ノ定業ヲ転シテ

と言う。そして盲目になっていたのが、松の葉を目にあてられると、もとのごとくになっていた。

以上のように下巻には本話を含めて五例あるが、上巻には見出し得ない。つまり、『験記』の編者が諸家の録に長谷観音の靈験を示す表現として、加筆あるいは改作したものである。

この事と関連して本話を見直してみると、『験記』の他の話が定業を転じてもらったり、子孫繁昌となったりするのは、観音への皈依の深さであるとするのに、本話は千手観音の像を作るからという形になっていて、少し違っている。この部分はやはり、高房が日頃から観音を信仰していたので観音に祈念したところが、亀が子を甲の上に乗せて浮かんで来たので感激し、観音造立を誓ったとするのが本来のあり方だと思われる。

このような不自然さは、亀の報恩に対する記述にも現われている。

畜生ノ異ナル知恩ノ心有。是併観自在尊ノ御方便ナル者歟とあって、亀の放生に対する報恩とはなっていない。つまり、善因による現報とはなっていないわけであるから、高房が亀を助ける必要はないわけであって、亀を観音の化身として高房の信仰の深さの

故に、子を助けたという話の方が、靈験譚としてはまとまっているのではないだろうか。

たとえば、亀報恩譚ではないが、『日本靈異記』上巻第六「憑念観音菩薩得現報縁」^⑤では、高麗に留学していた行善が、戦乱の中をさまざまに行くと橋がこわれ、船も無く河を渡れなくなった。そこで心に観音を念ずると、舟に乗った老翁が河を渡してくれた。そののち翁も舟も見えなくなったので、観音の応化であると思ひ、像を造り恭敬しようと誓願を發した。そしてついに大唐にたどり着き、その像を造り日夜帰敬した、というのが概略である。この話は『今昔』巻十六の一にも載せられているが、ほぼ同じである。

この話では、ただ観音に念じただけであり、仏像を造ったのは観音の応化の結果であって『験記』とは全く逆の形になっている。このことは、『験記』と『日本靈異記』との意図するところが違っているためである。すなわち、『日本靈異記』は「誠知、観音威力難思議矣」と言っているように、観音の威力のすぐれている点を強調しようとしているのに対し、『験記』の方は祈念して言っている内容、特にこの場合速かに千手観音の像を造り奉るといふ部分が中心となっている。たとえば、『験記』上巻第十四でも、

我宿願若成就セハ、必ス当寺ニ鐘ヲイテ進スヘシとあり、下巻第十四でも

小財ヲ不入大財ヲ不得ト答給ヒ……

とある。その答えた童子は観音の化身であり、さらに「因ナケレハ果ナシ」とも言っている。つまり「験記」はその底流に「勧進のため」ということがあるからで、『日本霊異記』と違っていて当然とも言えよう。

以上の事から、観音に祈念する高房の言葉は『験記』の編者の加筆であり観音霊験譚としての性格を強く持たせるものであることがわかる。

また、亀の放生を話としては入れなくとも成立するのに、わざわざこの部分に書き出しているのは、後半千手観音を造り、総持寺を建立する山蔭と切り離せない伝承が存在していたことを物語っている。これは本話の原典が既に持っていたと思われるので、その中心となっている山蔭と総持寺と本話との関連を考察し、さらに初期の『総持寺縁起』が原典として存在していたであろうことを明らかにしたい。

三、初期の『総持寺縁起』の形成

(a) 藤原山蔭の人物像

本話に登場する山蔭は説話上の人物ではあるが、説話の性格の一つに事実として語られるということがあるので、まず歴史上の山蔭

山蔭中納言説話の成立

について見ておきたい。

『大鏡』第五卷^④に、次のような一節がある。

この吉田神社は、山蔭中納言のふりたてまつり給へるぞかし。御まつりの日、四月子、十一月下申日とをさだめて、「我御ぞうにみかど、きさいの宮たち給ものならば、おほやけまつりになさん」とちかひたてまつりたまへれば、一条院の御時より、おほやけまつりにはなりたるなり。

ここでは、山蔭が吉田神社を勧請したことになっているが、その時期は示されていない。記録の上では、貞観年中に奈良の春日神社を勧請して神楽岡に社を建つとするものが多く、『吉田神社志』(大正二年発行)では、諸記録を並べ編者の言として、貞観元年としている。

山蔭は、貞観五年「為次侍従」とあり、貞観十七年には、藏人頭^⑤となっている。つまり、清和天皇の貞観年中、藏人所にあったわけで、この時期に平安京の鎮守として、また藤原一門の繁栄のために、氏神を奈良から移したものと思われる。

その後、摂津国に総持寺を創建するのであるが、本話の発端部の事件が起こる穂積も総持寺の近くに位置している。そして、現在この両所の周辺には多くの春日神社があり、藤原氏との関係の強い場所でもあり、山蔭自身も、元慶三年(八七九)十二月八日摂津国の

班田使となっている。^⑧

このように史実と本話との関連づけが大筋でなされているが、山陰について年代を明示している部分にも、このことが指摘できる。

①元慶五年七月十二日、幡摩守ニ任テ、同六年三月二日彼国ニ下向ス。

②仁和二年五月十五日ノ暁空ニ音有テ（略）納言急キ仏所ヲ見ニ、三尺ノ千手ノ靈像イマス也。

（仁和）
③同四年二月四日納言又薨。

これら本話に記されている年月日を『日本三代実録』で見ると

④播磨守ニ元慶六年正月七日

⑤中納言ニ仁和二年六月十三日

⑥没年ニ仁和四年（八八八）二月四日

となっていて、ほぼ④⑤は近く⑥は完全に一致している。従って史実として本話を位置づけようとする意図が働いていると考えてさしつかえないであろう。

一方、現在伝承としてしか確認できない山陰像も本話は含んでいる。その一つは、山陰を「日本料理中興の祖」とする伝承である。

現在総持寺でも吉田神社でも、山陰を日本料理、特に庖丁人の祖として祀っているが、なぜそのようなになっているのかは明確ではない。^⑨『改稿食物史』によると、山陰を庖丁人の祖としているのは四

条流で、その伝承では山陰が光孝天皇の命で料理の新式を定めたのに始まるとなっているが、史実として確認されたものではない。

ただ、光孝天皇の仁和三年二月十六日に、

勅イニ更衣従五位上藤原朝臣元善ニ為ニ女御。中納言従三位山陰之女也。

という記事が『日本三代実録』にあり、前年の仁和二年に山陰は中納言従三位となつてゐることなどから光孝天皇とのつながりの深かつたことは事実である。しかし、山陰はこの年六十二歳であり、仁和四年には六十四歳で亡くなつてゐるので、この時期に急に庖丁の故実が整えられたとも考え難い。

そこでもし何らかの形で山陰と料理、それも庖丁による魚鳥の料理とのつながりを求めるならば、貞観年中に蔵人になり、ついには蔵人頭になつた。この時期であろう。

蔵人所は、天皇の公私の生活の一切に関与している所であるが、特に料理との関係では御厨子所があり、そこへ魚を献上するのは鵜飼であつた。

『侍中群要』によると「東西宣旨鵜飼」で蔵人が二人東西に分れ、鵜飼を率いて参加しているし、「葛野河鵜飼進鮎鯉」ともあり、蔵人と鵜飼とのつながりは、日常的にも強いものであつたことがわかる。

「山蔭中納言説話」では、亀は鵜飼に殺されんとするところを救われるのであり、本話では穂積の鵜飼となっているが、これは総持寺の存在場所との関連によるものと思われるが、現在この近くに鮎川という地名が残っている。後代の『平家物語』や『宝物集』では桂川の鵜飼となっていて、地名は違っても鵜飼という点では、今昔「型」、「長谷寺」型とも共通するものである。このことは、「山蔭中納言説話」にとって鵜飼が欠くことのできない重要な地位にあることを示している。

また鵜飼と亀とのつながりは、鵜の餌として用いる点にある。その事は次の『梁塵秘抄』³⁵⁴の今様によっても知ることができる。

355。鵜飼は可憐しや、萬劫年経る亀殺し又鵜の頸を結び、現世は斯くてもありぬべし、後生我が身を如何にせん

415。鵜飼は悔しかる、何しに急いで漁りけむ万劫年経る亀殺しけむ。現世は斯くてもありぬべし、後世我が身を如何にせん、ずらん。

万劫年経た亀を殺し、しかも鵜の頸を結び、鮎を獲らねばならぬという鵜飼の仕事は、殺生を禁ずる仏教の掬まりと同時に、その罪深さが意識され、「後生我が身を如何にせん」という絶望感にまで至っているものと言える。この事は鵜飼のみでなく

240。傍き此の世を過ぐすとて、海山稼ぐとせし程に、万の仏に

山蔭中納言説話の成立

疎まれて、後世我が身を如何にせん。

とあるように、殺生を業とする者全体に言えることであり、その故に仏教者の救済の対象とされ、その反作用としての放生の功德が本話のような形で語られていったものといえよう。特に「定業亦能転」ずる長谷寺観音への信仰もこの点を逃してはあり得ないだろう。

山蔭が四条流庖丁の祖であるという伝承を決定づける資料は未だ見出し得ないが、その経歴からして全く根拠のないこととも言えない。むしろ、亀報恩譚としては特殊な形となっている本話とのつながりにおいては、積極的な意味を持つものとしてとらえたい。

また、本話の説話としての重要点の一つに長谷観音自作の像を山蔭が得るといふことがある。この間の事情は後述する『久修園院縁起』にも同じ型で語られているし、『続古事談』³⁵⁵では、薬師仏を得る話として載せられている。すなわち、太秦広隆寺の客仏である薬師仏について、「一説二ハ」として上げている話である。山蔭が仏をつくろうと思っていると、夢で、始めて出会った人を仏師と頼めと言われその通りにすると、その人は長谷寺の観音であり、その事がわかるのは、文殊菩薩が門をたたいて呼んだからだということになっていて、本話と型は同じである。

同じく長谷観音が仏像を造る話としては『河内国小松寺縁起』³⁵⁶がある。

長谷寺観世音菩薩撰津国摠持寺本尊自作御遷之時寺村郷有小松一本。則代取以一尺二寸許木作方九寸観音像。奉納于高三尺御堂矣。然者御本尊長谷寺観世音菩薩自作観音像也。

これは総持寺の観音を長谷観音が造つたその還り道でさらに小松寺観音を造つたというものであり、本話との関連が強い。縁起はさらに寺名が荒山寺から小松寺になった由緒を合わせて説いていて、それを実現させたのは

山陽道修行者天台学徒僧道智当山三七日參籠而祈念菩提有種々靈夢。放生信心勸進十方欲造一堂

とあるように、山獄修行者だと記している。

また同寺の伝承として秦氏女性が

請長谷寺智道上人遂御堂供養。

ともあって、長谷寺との関連が強くあり、その勸進僧により、仏像・御堂とも造られたことを伝えるものである。

以上、歴史上、伝承上両面の山蔭の人物像と本話との関連を考察してきたが、いずれも本話と深いつながりを持っていて、しかも本話が山蔭を中心として構成されたものであることも明確になったと思う。

(B) 総持寺の創建と発展

総持寺の創建年代を本話では寛平二年（八九〇）として次のように述べている。

同四年二月四日納言又覺。生年六十五。遺息七男七女有。同心シテ一寺数字ノ宮作ヲナシ、二尊利生ノ道場トス。則惣持寺ト号。寛平二年四月四日父第三回ノ遠忌ニ当テ、供養ヲ遂ク。

また、「大阪府全誌」（卷之三）も同様の伝承を載せている。

撰津国三島郡三島村大字中城は、寛平二年四月総持寺の観音堂を建築する時、忍頂寺村字コモ池屋敷の住民同観音に帰依し、其の普請の役夫となりて本地に留まり、引き続き住せしより、一部落をなした。

これらから、山蔭の三回忌の年に当たる寛平二年をめざして、観音堂が建てられ、寺としての形を整えていったものと思われる。

その後の事について『朝野群載』巻第一「文筆上（銘）」の中に、「総持寺鐘銘」として次のようにある。

粵若祖父越前守藤原朝臣、帰心於普門妙智。傾首於無破大悲。而墜露溘然。閃電倏爾。納言尊考。軫先業之不遂。歎善因之未成。多以黄金。付入唐使大神御井。買得白檀香木。造于手観世音菩薩像一体。仍建衢場於撰津国島下郡。安置此像。号曰摠持寺。於是第二男備前権介公利。鑄豊鐘一口。于時延喜十二年夏四月八日。為銘曰、已上略記。（以下略）

この延喜十二年は山蔭の二十五回忌に当たり、総持寺が山蔭を中心として創建され、更に發展途上においても、山蔭のことは意識されていたのである。

また、銘文の内容は

祖父高房の観音信仰を父の山蔭が受け継ぎ、入唐使大神御井に黄金を托し、白檀の香木を買わせてそれで千手観音を造り摂津国島下郡に安置場を建て、それを総持寺と号した。そして第二男の公利が鐘を鑄た。

というものであるが、『験記』の本話の骨子と一致しており、初期『総持寺縁起』の成立と大きく関連するものである。

総持寺が山蔭を祖として、その子息たちの合力によって發展していった様子を示すもう一つの記録は『勝尾寺文書』にある「惣持寺資財帳案」で、承平五年（九三五）二月五日付のあるものである。主な点を次に抜き出してみる。

一 仏像

二尺六寸白檀冊手観音像一軀本願

己上安置南仏御堂

人々願仏菩薩

一 別院

山蔭中納言説話の成立

勝尾山寺迄処

檀越

（如無）

大僧都 在判

前山城守 在判

（藤原兼三）

陸奥守 在判

右京大夫 在判

（藤原中正）

右中弁兼式部少輔 在判

（藤原在衡）

これによると、総持寺は勝尾寺を別院とするほど、勢力が増大していたといえる。また、檀越として上っている、如無、兼三、中正は山蔭の子であり、在衡は山蔭の長男有頼の子となっているが、実は如無の子である。^⑧

以上のように、寛平二年から承平五年までの四十五年間に、相当強大な寺院となっていたのは、藤原氏北家とのつながりが強く維持されて来たからである。

勅願寺となったのは、一条天皇の即位と同時であり、同じく長保三年（一〇〇一）^⑨十一月一日には、阿闍梨五口が置かれている。これには山蔭の子中正の力が大きく働いているのではないかと思われる。それは先に引用した『大鏡』の記述に見られるように、中正の女時姫が兼家に嫁して詮子を生み、詮子が円融天皇皇后となって一条天皇を生んでいる。また道長・道兼・道隆の母でもあり、一条天

皇時代の摂関政治の中心人物ばかりを、中正は子孫として擁しているからである。

以上を整理すると、一条天皇時代に、山蔭一族の繁栄があり、その基を築いた山蔭にも目が向けられていたと思われる。山蔭の勧請した吉田神社には、永延元年（九八七）宮幣が奉られるようになり、以後卜部氏が奉仕することになるのであるが、この年は山蔭の没年（八八八）から九十九年目、つまり百回忌にあたり、これを機としてすることは明らかである。そしてこの時期に初期の『繪持寺縁起』も作られたのである。

(c) 初期『繪持寺縁起』の成立

本話で吉田神社について述べているのは、次のように霊木が落ち着く地としてである。

終ニ洛陽東山吉田ノ亭今吉田社是也靈異尤多シ。

前述のごとく吉田神社は、宮幣社となるまでは、山蔭の個人の勧請によるもので、公に祀られていたわけではなかった。従って「吉田ノ亭^⑤」といい、編者の言として「今吉田社是也靈異尤多シ」と述べられているのである。この部分によって、原典では「吉田ノ亭」であり、その成立年代も吉田神社が宮幣社となる前と見ることができよう。

つまり、原典と思われる初期の『繪持寺縁起』は永延元年（九八七）宮幣社となるまでに創られていたのである。

また、永観二年（九八四）に源為憲が「三宝絵詞」を撰進しているが、この中の八幡宮の放生会について書いている部分で、龜報恩譚として「今昔」巻五の十九話にも載せられている洪水を予言する龜報恩譚が上げられているのに、本話については触れていない。代表的な日本の龜報恩譚である本話が載せられていないということは「今昔」型であれ、「長谷寺」型の本話であれ、この「三宝絵詞」より以後の成立ということになるであろう。

もう一つ本話原典の成立に関連あるものとして、天正写本にはないが、仏教全書本、統群書類従本にはある次の文を上げることができさる。

彼ノ惣持寺ノ新縁起ノ作者ハ知ラズ。本縁起ハ四条大納言公任卿ノ作ト云々、新本聊異説アリ。コレハ本縁起ヲ以テ此ノ記ニ書入ル也。

これがいつごろ書かれたのか不明だが、『験記』の本話は「本縁起」によるもので、その作者は公任（九六六—一〇四一）であるということである。「新縁起」が現存のものに近いとするなら、全く違っているのは「吉田ノ亭」「吉田ノ今長谷寺」について触れていないという事である。山蔭を中心にして考えた場合、吉田神社も、吉田の今長谷寺ともに山蔭の創建であり、入れられていても不自然ではないが、繪持寺を中心として考えるなら、これらは全く不要

なものであるから「新縁起」は省いたのであろう。

「本縁起」が公任の作であるかどうか確証がないが、その頃にはできあがっていたということであり、やはり『今昔』以前の成立が考えられる。

『験記』にもこれらを傍証し得るものとして、上巻第七話の長勝寺の話の次の一文がある。これは、宇多天皇が勅願とするに際して

当寺ノ靈験建立ノ次第ヲ御尋アリ。同八年二月十日、天神并当寺ノ俗別当三綱等、縁起秘記ノ二巻ヲ以、公家ニ奉ス。

とあるように、秘記録起などを奏上させているわけで、総持寺の場合も同様であったと考えてよいだろう。

以上のように、初期『総持寺縁起』の内容は、山蔭の百回忌という成立事情を反映しながら、鐘銘を骨子として、山蔭の幼少時から死後の三回忌まで含めての一代記とも言えるものであり、総持寺を「三代合力ノ伽藍」として認識し得る山蔭一族の子孫繁昌を記すものであって、勅願寺となった九八六年か、山蔭の百回忌に当たる九八七年には成立していたと考えられる。従って「今昔」型が如無僧都のエピソードを話の中心としていたのとは根本的に違うものである。

四、「験記」型の後代への影響

山蔭中納言説話の成立

この型を伝えているのは『久修園院縁起』と『三国伝記』のみであるが、後者の長谷寺関係の説話は『験記』をそのまま用いていて、本話も同様であるので、ここでは触れない。そこで、前者の内容を中心に考察し、散佚物語である『山蔭中納言』にも触れ「山蔭中納言説話」との関連を考えたい。

(a) 『久修園院縁起』について

久修園院は、現在大阪府枚方市樟葉にあり、『行基年譜』には次のようにある。

行年五十八歳乙丑

聖武天皇二年神亀二年乙丑

久修園院 山崎 九月起

在河内国交野郡一条内

(略)

行年七十二歳乙卯

聖武天皇十六歳 天平十一年乙卯

安_二居久修園院_一 得度百八十四人。

すなわち、神亀二年、行基が山崎橋に接して作ったのが久修園院であり、行基の伝承と当然つながりを持つものである。

この縁起は、足利六代將軍義教の頃紛失したので、公家の許しを得て旧草を模写したとして大永四年(一五二三)二月吉日の奥付が

あり、現在までどのように受け継がれて来たのか不明である。

縁起の構成は大きく二つに分かれており、前半は久修園院の創建説話で、本尊の釈迦如来は行基の所願で、長谷寺観音自作のものとして述べている部分である。これは先に見た『験記』下巻「当寺未_レ建立_二前_レ帰_レ此_レ山_者成_三所_レ願_一事第一。付_レ諸_人得_レ益」の最後に載せられている久修園院に関する記述とほぼ同じである。後者には聖徳太子との関連が述べられていないが、釈迦の像を刻む前後の記述は『験記』の繪持寺の観音像を造る場面の記述と全く同じである。従って前半部は、『験記』以前に、当院の縁起として存在していたと言える。

後半部は山蔭中納言を鎮守とし、亀道祖を以て護法神と崇むる理由を説明しているものである。その中に、「父_レ高房、子_レ山蔭」とする「長谷寺」型の亀報恩譚が出てくる。その前半部はほとんど『験記』の繪持寺の記述と同じで、違う点は、河尻の津で山蔭が海に落とされるが、此寺を拜して祈ると亀が子に乗せて浮かんで来たとする点と、山蔭が高房の没後繪持寺の観音を造立して亡父の願を遂げ此観音を長谷の童子彫刻し給うという事は、久修園院の常なき因縁があったからだとして述べて、当院と結びつくよう改作している点である。そして、後日譚として山蔭が老後、当院で命を終え梵天王となつてこの寺を守護しようといったことや、亀が吉凶を相すると

いう亀卜の事を述べて終っている。この最後の部分の亀卜とこの話を結びつけているのは、「山蔭中納言説話」の中でこの縁起のみである。亀卜は卜部氏が業としていたものであるから卜部氏とかかわりがあり、山蔭を祖とする者によって書かれたのであろうが、この点の伝承は現在当院に伝わっていない。

ただ、淀・山崎・水無瀬など、桂川・宇治川・木津川が合流して淀川となる付近には、摂関家の散所があり、水上運輸にこれら散所が関係していたと言われ、同じく桂の近辺、摂津の垂水の東西の散所なども本話と関連あるものと思われる。

この散所は「散所法師」「散所雑色」などと記録されている人々をかかえており、彼等は呪術的な特殊技能を持っていて、新しく土着したり、或は社寺に寄食するものもあったのである。卜占祈祷と共に呪言を唱え歌舞を演ずるようになっていったとも言われている。これらは鎌倉時代から室町時代にかけての、いわゆる中世の散所であるが、一方では水陸の運輸を担いながら、摂関家、社寺の雑用を務める者があり、それらの中から陰陽師や唱門師も出てきたのである。

これらの散所と法師の存在がどれほどこの縁起とかかわっているのかは不明であるが、散所を基盤として縁起の形成と伝承がなされて来たという推測はできるのではないだろうか。

長谷寺を中心とした勸進僧の活動と、長谷寺を支えて来た藤原北家の人々の動きとの接点が「長谷寺」型の一つの成立基盤であり、長谷観音の信仰の拡がりに寄与したといわれる時衆の僧たちと、その師と仰いだ行基の事跡との関連も、また一つの成立基盤となっている。いずれも、その根拠地の一つに散所があり、本話の場合には、淀川水系の主要地点を中心に行っているところに大きな特徴がある。

(b) 散佚物語『山蔭中納言』との関連

『山蔭中納言』と題する物語の存在を知り得るのは、『知歌色葉』『八雲御抄』、『代集』の中の、物語名を列挙した中に見られるからである。その内容までは知り得ないのであるが、『知歌色葉』の成立した一九八八頃から、『代集』の成立した一二八八頃まで、約百年間ほどは知られていなかったことになる。従って平安朝末期にはできあがっていて流布していたものと思われる。

この物語の内容がどういうものであったのかは推測の域を出ないが、黒川春村は『古物語類字抄』の中で

按に、此物語は、山蔭卿の子息、如無僧都のをさなかりし時、継母悪みて海に落し入たりしを、さきに中納言の放たれし亀の助けあげし事をかけるにはあらじか、もし然らば実記とも云べし。

と述べ、明らかに「今昔」型を指してその内容としている。

ところが、市古貞次氏は、

山蔭中納言説話の成立

内容の骨子は『今昔物語集』『十訓抄』『宝物集』『三國伝記』から、窺ふことができる。それは山蔭中納言が継母の為に海中に落されるのを亀が救ひ上げるといふ、いはゆる如無僧都説話であろうと推測せられる。

と述べておられて「長谷寺」型と「今昔」型とを合わせた内容のようにされている。

また築瀬一雄氏は、『今昔』が古い形を存しているものであるとされ、この物語名が「山蔭中納言」とする点に、やや名実相伴はぬ如き感がないでもないが、ただ単に名称のみから、物語の内容を規定しようとする意図は放棄すべきであろうと述べられている。

いずれにしても如無が中心となった「今昔」型を推測させているが、『山蔭中納言』という題名からすると山蔭が主人公であり、無の話が割り込むとしても、付属的なものになるのではないだろうか。従ってこの物語は山蔭の一代記的性格を持っている。「長谷寺」型を骨子とし、中正の娘たちが築いた摂関政治にかかわるものであったと思われるし、その山蔭一族繁栄の基盤が総持寺を中心とした観音信仰に裏づけられていた点も考慮するなら「今昔」型を骨子とすることはできないであろう。

五、「山蔭中納言説話」の文学性

もともと文学たり得る説話の発生は、事実あるいは事実と信じた事柄でいわゆる人々の「はなしのタネ」になるもの、興味と関心の対象になる「世間話」にあり、それを基軸にして対立する人間の緊張した関係や、さらには人間の内面の葛藤にまで高められたものが説話文学であろう。

「山蔭中納言説話」は亀報恩という人と動物との心情の交流を中心にしたものであるはずだが、「長谷寺」型ではこの点は全く無視され、観音の靈験という人間性を越えたものにすりかえられてしまっているし、「今昔」型においても付属している継子譚にリアリティはあるが、中心である亀報恩譚に人間的主題が十分に盛り込まれず成熟しないままに終っている。これらはこの話を語り伝えていた集団の内的意識とも関連するものであり、後代になるほどより断片的となり、文学性に乏しくなっていたのも、亀報恩というよりも亀に助けられるという特異な体験をした特定の個人である如無僧都の話に中心が移っていき、この如無の話が出ない限り亀報恩譚としても忘れられていったのである。報恩ということで仏教説話として取り入れられることはあっても、一般民衆の関心と呼ばなかったのは、話の「核」が奇異なことであるはずなのに、一人の僧に付属してしまい、「核」が移動したため広まりと深まりを持つ機会が乏しくなっていたのである。

つまり、説話はそれを必要とする人々の要求と常に一致する形で存在するものであり、言え換えると時代に即した変転をしていくものであり、その要求の違う集団の間では話の交流がなされず、一旦できあがった説話は、その享受者との関係も大移動しないということである。特に仏典の教義を説き、仏像の靈験を説く仏教説話では「仏教」という範囲を越えての説話の成長はあり得ないわけである。もしそこに文学性を見い出そうとするならば靈験という超人的、神秘的な発想あるいは虚構を通して人間の真実がどう内在的に表現されたかという点にあるだろうが、「長谷寺」型では靈験そのものの奇特を説くことを目的としている以上、人間性の描写はわずかに父高房と子山蔭との人間関係（父子恩愛の情）にしか見られず、また継母の憎悪すべき人間性にも大きな比重が与えられず、その結果山蔭一族の子孫繁栄の説話とはなり得ても、あらゆる聞き手の人間性を揺り動かすものとなるような、質的發展はなかったのである。ここに寺院の縁起と結びついた説話の典型型とその文学性の限界とを指摘することができるであろう。

註

① 本文は、永井義憲氏校「古典文庫」所収の天正写本による。

② 拙稿「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」（同志社

国文学』第九号）

- ⑧ 「日本古典文学大系」による。
- ④ 「日本古典文学大系」による。
- ⑤ 『雍州府誌』巻二『大日本史料・第二編之一』永延元年十二月十七日条など。
- ⑥ 『日本三代実録』による。
- ⑦ 『職事補任』（『群書類従、補任部』所収）による。
- ⑧ 摂津国と山蔭一族とのつながりは深い。先祖である魚名が別業をこの地に持っていた（『続日本紀』卒伝）し、山蔭の子の中正も摂津守となっている（『尊卑分脈』による）。
- ⑨ 『日本三位実録』による。
- ⑩ 総持寺現住職の書状によるご教示では、『験記』の中で山蔭が観音を造った童子に千日間供養物を差し出した事に発すると述べられている。
- ⑪ 森末義彰、菊地勇次郎両氏共著
- ⑫ 『和名類聚鈔』の「厨」の説明の中に、「庖料理魚鳥者謂之庖丁俗伝」とあり、庖丁が魚鳥の料理をする者を指していたものと思われる。
- ⑬ 『同書巻十』所収。
- ⑭ 「日本古典文学大系」による。
- ⑮ 『同書第四』所収。
- ⑯ 『統群書類従第十七輯ノ下』―「釈家部八十六」所収。
- ⑰ 『国史大系』による。
- ⑱ 『尊卑分脈』による。
- ⑲ 『大日本史料・第二編之四』―「長保三年十一月一日」の条に、明豪の奏状があり、その中に「今上陛下踐祚之日、被下宣旨、為御願寺也」とある。一条天皇の即位は寛和二年六月二十三日である。
- ⑳ 『大日本史料・第二編之一』―「永延元年十二月十七日」の条に「始メテ吉田祭ヲ行フ」とある。
- ㉑ 『和名類聚鈔』によると「亭」和名阿波良也。波良とある。
- ㉒ 山蔭が水中に落とされる部分の記述に脱落があるが大筋では一致している。
- ㉓ 『同志社大学国文学会大学院部会、研究会報第4号』に全文掲載した。
- ㉔ 『統々群書類従第三』所収。
- ㉕ 現住職のご教示でもこの点不明である。
- ㉖ 森末義彰氏『中世の社寺と芸術』所収「散所」による。
- ㉗ 堀一郎氏『我が国民間信仰史の研究 二』―「近世特殊民の呪術的宗教的機能」による。

山蔭中納言説話の成立

- ②⑤ 豊田 武氏『中世日本商業史の研究』―「卸売市場の成立」による。
- ②⑥ 永井義憲氏『日本仏教文学研究 第一集』―「勸進聖と説教集」による。
- ③⑦ いずれも『日本歌学大系』所収。成立年代は各本の解説による。
- ③⑧ 『墨水遺稿卷之一・也部』の「山蔭中納言物語」による。
- ③⑨ 同氏『中世小説の研究』による。
- ③⑩ 同氏『説話文学研究』―「山蔭中納言物語考」による。

―完―